【レポート】

2022年静岡自治研集会において「コロナ禍で子ども支援に立ち上がる市民との協働」（西東京市子ども条例の理念を活かすまちづくり）と言う題でレポートを書かせていただきました。あれから２年、西東京市職員労働組合員「自治研センター」のメンバーとして、組合補助金交付サークル「ワイワイトーク」のメンバーとして、市民と協働し、様々な活動をしてきました。

西東京市の2018年10月に施行された「西東京市子ども条例」の前文です。

『子どもは、自分の意見を自由に表明することができ、自分に関わることやまちづくり等に参加することができます。』

本レポートは、市民団体が立ち上げた子ども食堂や子どもの居場所にて、子どもたちが自分の意見を表明し、まちづくりに参加するようになってきた様子をまとめたものです。

子ども条例の理念が息づく西東京市を、市民と共に作り続けることこそが、自治体職員、労働組合の役割であると強く実感しています。また、市民団体と協働し、実際に市民団体が実施している場所で、自らが経験することで、気付きを得ることがたくさんありました。また、子どもたち、市民の方々、職員労働組合の方々、サークルワイワイトークのメンバーからたくさんのことを学ばせていただきました。ここに深く感謝申し上げます。

子どもたちとともに「みらい」へ

── 西東京市子ども条例の理念を活かすまちづくり　ＰＡＲＴ２ ──

東京都本部／自治労西東京市職員労働組合・西東京市自治研センター　相馬　明美

1.　はじめに

2022年の静岡自治研集会では、「コロナ禍で子ども支援に立ち上がる市民との協働」と言う題で、西東京市子ども条例の理念を活かすまちづくりについて、レポートを書かせていただきました。あれから２年、コロナ禍で困窮する子どもや保護者のために市民団体が立ち上げた子ども食堂で食事を待つ間過ごす居場所、また、放課後の子どもの居場所にて、市民と一緒に継続して活動してきました。私がこの２年間、主に活動してきたのは、「こども食堂げんき」と「げんきひろば」の２か所です。

（1）　こども食堂げんき

2021年６月に「こども食堂げんき」という名前の子ども食堂が西東京市にできました。西東京市職員労働組合自治研センターのメンバーは、市内の子ども食堂への支援を継続して実施しています。こども食堂げんきは、市民が立ち上げた子ども食堂で、一戸建ての個人宅の１階で実施しています。１回に入ることができる人数が８人と限られていたので、食堂の席が空くまで、外の道路でずっと待っている状

態が続きました。そこで、待ち時間を過ごすための居場所として、すぐ近くにある公共施設、障害者福祉センターの集会室を借りることになりました。月２回、こども食堂の食事ができるまでの待ち時間、もしくは食事を食べ終わった後に親子で過ごす居場所として、保護者と子どもたちが利用しています。

（２） げんきひろば

2024年４月に、こども食堂げんきを実施している場所で、「げんきひろば」という放課後の子どもの居場所を開所しました。月に１回、火曜日の放課後、子どもたちがやってきます。幼児から小学生まで、数人の子どもたちがやってきます。宿題を持ってくる子どももいます。宿題をやり終わると、「やりたい」と思う活動（ボードゲーム、ボランティアスタッフが用意した工作、描画など）を、18時の帰る時間まで楽しみます。

（３） みらいラボ

2022年４月に、「日本みらいラボ西東京フリースクール」というフリースクールが西東京市にオープンしました。このフリースクールは、西武柳沢駅に隣接している柳沢商店街の中にあります。また、2024年に８周年を迎えたやぎさわベースという駄菓子屋の隣にあります。ここは、不登校や引きこもりという課題を抱える子どもの保護者の相談にのり、子どもたちの居場所として、不登校の子どもの通う場所として、実践探検型のフリースクールとして開所したばかりです。ここにも自治研センターのメンバーが出向き、活動を応援しています。

自治研センターのメンバーとして、職員組合補助金交付サークル「ワイワイトーク」（障害児のことを学習している文化サークル）のメンバーとして、子どもと保護者が来る居場所での親子での遊び、放課後の居場所での親子、子どもの遊びを、市民のボランティアスタッフとともに考えて、用意し、関わってきました。子どもの居場所で、地域のボランティアスタッフなどの大人は、どのような態度で子どもたちに接していけばいいのでしょうか？　試行錯誤しながら、関わってきました。

2.　子どもの居場所で大切にしたいこと
「子どものやってみたい気持ちを尊重する」

（１） 子どもが自分で活動を選ぶことができるなど、主体性が育つような環境を設定する

私が勤務している西東京市の公立の「児童発達支援センターひいらぎ」では、発達に課題があったり、障害がある子どもたちが、療育に通ってきています。そのような子どもたちと関わっていくなかで、大切にしたいこととはどのようなことでしょうか？　それは、なんでも大人の指示通り動く指示待ち人間を育てることではなく、自分らしく生きていくために、自分で選んでいいことは、主体的に自分で選ぶことができる子どもに育ってほしいという思いです。

市民団体が活動を行っている居場所では、自分で選んでいいことは、自分で選び、責任を取る。指示され、管理されて決められたことを、そつなくこなすのではなく、どんな小さなことでも、自分で選んでいいことについては、自分の心の中の声を聴いて、選ぶことができるようにするには、どうしたらいいか常に考えてきました。私が関わっている居場所では、たくさんの工作キットを用意しました。こど

も食堂げんきの待ち時間では、すぐに出来上がるように、塗り絵、シール貼り、紙皿で作るコマ、白い画用紙に好きな絵を描くなど、短時間で仕上がるようなキットを用意しました。子どもたちは、一通り、全ての工作キットを見て回り、やりたいものを選びます。画用紙の色、シールの柄、ペンの色も自分で選びます。

げんきひろばでは、放課後の時間なので、ゆっくり時間をかけて、作品を仕上げることができます。材料（画用紙、シール、マスキングテープ、ビーズ、紙粘土、紙皿など）や道具（はさみ、カラー筆ペン、絵具、マジックなど）をたくさん用意しました。過去にやって楽しかったものについては、「これがつくりたい」と言えば、その材料や道具がすぐ出せるようにしてきました。

（２） 子どもからの発信を待つ

こども食堂げんき及びげんきひろばでは、ボランティアスタッフと保護者と子どもたちが、静かな環境の中、描画や工作を楽しみながら、ごく自然な会話が生まれることが想定されます。ボランティアスタッフは、穏やかな雰囲気の中、子どもたちからの発信を丁寧にキャッチするようにしました。どんな小さな発信もキャッチし、優しく応えるようにしました。

（３） 子どもたちには、プラスメッセージを贈るように心掛ける

前述した私が勤務している「児童発達支援センターひいらぎ」では、ペアレントトレーニングの考え方を取り入れて、子どもたちが課題をやろうと取り掛かった時、やり切った時、できた時ほめるなど、プラスのメッセージを贈るよう心掛けています。子どもたちの居場所では、描画や、工作が主な活動なので、作品を「素敵だね」「かわいいね」「この色がいいね」と、ボランティアスタッフは、プラスメッセージを贈るようにしました。子どもたちだけでなく、「お母さんがつくった七夕飾り、素敵だね。」保護者をほめると、「最近ほめられたことないので、嬉しい」と言って笑顔になりました。保護者の方を褒めると、保護者の方が、自分の子どもを褒めるようになってきました。

3. 子どもたちの成長
「居場所での他者との楽しい交流」

（１） 主体性を発揮する子どもたち

2023年12月17日　こども食堂げんきの第３回お楽しみ会が開かれました。こども食堂げんきの学区である保谷小学校の体育館を借りて、50組の親子が集まるお楽しみ会です。子どもたちと地域の市民団体、市民ボランティアスタッフ、保谷小学校の校長先生はじめ教員の方々、西東京市の行政職員、職員組合自治研センターのメンバーが、たくさん参加しました。そこで、2022年までは、お楽しみ会を見る側だった子どもたちが、お楽しみ会に来る子どもたちや保護者、ボランティアスタッフに楽しんでもらいたいと、コントとパフォーマンスを兄弟で考えました。また、小学校の体育館に置いてあるピアノで子どもたちがよく知っている曲を練習して弾いた高校生もいました。

子どもたちは、イベントなどでサービスを受ける側だったのが、提供する側に変わっていたのです。自分から、「やりたい」という子どもたちが、たくさん出てきて、私たち地域の大人は、どうすれば実現できるか一緒に考え、応援するようになってきました。

（２） 増えていく他者（友達）との対話の時間

ある日のげんきひろばでの出来事です。マスキングテープをたくさん用意して、自由に画用紙に貼っていました。マスキングテープに東京駅の駅舎が印刷してありました。Ｄくん「ぼく東京駅にいったことあるよ」という話から、家族で過去に経験した出来事を次から次へと話していました。同じようにマスキングテープを貼りながらＥちゃんが、「ふーん、そうなんだね。わたしは、ここには行ったことないよ」とＤくんの話を聴いて、自分の家族の話をしていました。それをＤくんは穏やかな表情で聞き、

黙々と自分のマスキングテープの作品を作っていました。Ｄくん、Ｅちゃん、隣同士で話をしながら、それぞれ、素晴らしい作品を仕上げました。スタッフのみんなで、「素敵」「この色遣いがいいね」「デザインが斬新だね」と褒めました。

（３） あちこちで起きる化学反応（多様な人たちとの交流）

居場所での活動は、いつも楽しいことばかりではありません。こども食堂げんきの待ち時間の居場所で、兄弟が喧嘩したこともありました。弟さんを、自治研センターのメンバーが廊下に連れて行き気持ちを落ち着かせ、お兄さんは、ワイワイトークのメンバーが子どもの気持ちが落ち着くような働きかけをしてきました。その後、二人が落ち着いてから、他の子どもたちとの遊びに誘いました。最終的には、保護者と兄弟で、食堂のごはんを食べて帰ることができました。

ある日のこども食堂げんきでの居場所での出来事です。数種類の工作キットを用意してあります。その中から自分のやりたいものを選び、工作を仕上げます。折り紙で折る手裏剣の手順書を用意しました。その手順書を見て順番に折っていけば一人で手裏剣を折ることができるようになっています。

昭和生まれのボランティアスタッフ　「この手順書見てもうまく折れないよ。どうしたらいいのかな？」
平成生まれの中学生　「この先の方は、ここに入れるんだよ」
昭和生まれのボランティアスタッフ　「あー　本当だ。こうすれば手裏剣ができた。」
令和生まれの幼児　「僕にも作って」
平成生まれの中学生　「いいよ」
平成生まれの小学生　「私も知ってるよ。教えてあげる。」
令和生まれの幼児　「できた」
平成生まれの小学生　「みんなで飛ばしてみようよ」
みんなで「せーの」といって手裏剣を飛ばし合う。

どのようなことが起きたとしても、ボランティアスタッフは、みんな、子どもたちを守ることに徹しています。たまたま、居場所にいた大人や、子どもたちに助けてもらいながら、楽しい経験や、対話や、交流をしています。

4.　まとめと今後の課題
「みんなで、子どもをまんなかに、わいわい、わくわく、いきいき」

（１） 自治体職員は、地域へ飛び出そう

直接市役所に来所する市民、児童発達センターひいらぎの門を叩く市民、市民団体が実施している子ども食堂や子どもの居場所で出会った市民から、学ぶことがたくさんありました。市民団体が実施しているイベント会場で、多くの方と出会い、新たに学ぶことがたくさんありました。外国籍の子どもたち、ひとり親家庭の子どもたち、学校にいけない子どもたちと直接話すことで気づいたことがたくさんありました。

「市民の今の思いに触れる。子どもたちに直接出会う。保護者と直接話をする。」地域に飛び出していってこそ得られた貴重な経験ばかりでした。

（２） 大人が学び続けよう

①　公民館発信の学び

西東京市では、公民館主催の講座で、市民の学びの機会を提供しています。公民館での学びに大勢の市民が参加し、様々な社会問題について、市民が活発に意見を交換し学んでいます。「子どもの貧困について考える」という公民館の講座を受講した市民の方が立ち上げた子ども食堂があちこちにで

きました。2024年６月現在西東京市の子ども食堂の数は30カ所になっています。

現代的課題を考える講座（ゆっくりと未来に向かおうという講座）（公民館主催）を３年続けたことで、西東京市内に「子どもの居場所」が増えてきました。

②　たくさんの人から学び続ける

市民団体で活動を共にしていると子どもたちが笑顔になる事だけを願っている市民の方、今できる具体的な行動を起こしている人に出会います。お子さんに課題のある方が、自分の子どもだけでなく、社会の問題としてとらえ、多くの同じ課題を持つ子どもたちや保護者のために、ともに学んでいこうと活動なさっている方がいます。今、具体的にアクションを起こしている地域の市民の方々、長く職員組合活動をしてきた先輩の方々からたくさんのことを学びました。

（３）　大人たちが繋がり続けよう

①　自治研センターのメンバーと市民団体が繋がり続ける。

②　市民団体が横に繋がり続ける。

地域で子どもたちを笑顔にしていきたいという取り組みは、一市民の声だけでは実現しません。「やろうよ」と声をかけた人が、たくさんの仲間に呼びかけ、準備を入念にして、何度も会議を開いて、やっと実施にこぎつけます。自治研センターは、たくさんの市民団体とコラボして、子どもたちが笑顔になる取り組みを実施してきました。

2024年３月10日　だがしの日　こども縁日　田無神社＆總持寺＆アスタ専門店街　能登半島地震支援活動

2024年５月11日　段なしＭＡＲＣＨ　障害者モバイルトイレの体験　能登半島地震支援活動　地域の防災、障害者のイベント

（４）　子どもたちの意見、声を聴いていこう

①　西東京市子ども条例すごろく

西東京市子ども条例すごろく「マジか！」が、2023年12月に完成しました。すごろくで遊びながら、西東京市子ども条例のことを、子どもの権利のことを知るきっかけになるすごろくです。すごろくで使う「マジか！　カード」は、市内の公民館、児童館に設置された「マジか！　ＢＯＸ」に子どもた

ちが実際に意見を寄せてくれたものです。子どもの意見を取り入れ、完成したすごろくは、市内の児童館、子ども食堂、子どもの居場所に置かれ、子どもたちが、いつでもすごろくで遊べるようになっています。

すごろくで遊びながら、「自分の意見を表明する子どもたち」の声を、児童館職員が、子ども食堂、子どもの居場所にいる地域の大人たちが、これからも聞いていきたいと思っています。

② 「げんきひろば」の子どもたち

「げんきひろば」に月１回、必ず来るＦちゃん。挨拶以外は一言もしゃべらず、もくもくとボランティアスタッフが用意した工作を仕上げて、大切そうに家に持って帰っていました。１年以上経った時、フェルトの貼り絵をしていて、Ｆちゃんは「この色ある？」と聞いてきました。その色のフェルトを出してあげると、ある国の国旗を貼りました。「これはお母さんの実家の国なの」と話し、それから家族のこと、本人の家での生活のことを話し出しました。

子どもたちが、自分から、自分のこと、家族の話をするには、大人との信頼関係が大切だと考えられます。また、実際に話をするまでには、長い時間がかかるのではないかと思われます。居場所では、いつもいる顔見知りの大人がいることが子どもたちの安心につながるのではないのでしょうか？

居場所の活動は継続して実施することが大切だと思われます。なかなか子どもたちは、心の声を他者に話すことは無いかもしれません。それでも、ゆっくり待つ姿勢が大切だと思われます。

③ 「日本みらいラボ西東京フリースクール」の子どもたち

子どもたちを取り巻く環境は速いスピードで変化しています。不登校や引きこもりの子どもたちが増えています。また、子どもたちの家庭内に子どもたちにとって辛いと思われる現実が存在する家庭があります。その現実は、私たちが変えることは難しくても、月に１回、２回でもいいから温かい野菜たっぷりの季節感を味わえるようなおいしい食事を食べて欲しいという思いから、西東京市では、たくさん子ども食堂ができました。そこで、おなかを満たして欲しい。

そして、おなかだけでなく、心も満たして欲しい。

地域の大人に「どうしたの？」と声をかけられ、話を聴いてもらい、「〇〇ちゃん」「△△くん」と名前を呼ばれて地域の大人、保護者から、プラスメッセージをたくさん与えられた子どもたちは、自分の意見を表明することができるようになっていくのではないでしょうか？

子どもたちだけでなく、私たち大人は、自分たちができることを行動していく、自分の意見を発信していくことが大切なのではないかと考えました。

自治体職員として

職員労働組合員として

自治研センターのメンバーとして

サークル「ワイワイトーク」のメンバーとして

子どもの居場所で経験し、感じたことをこうしてレポートとして発信することが、今、私にできることだと思っています。

西東京市にできたフリースクール「日本みらいラボ西東京フリースクール」は、西東京市の商店街の中にできたフリースクールです。地域の方が子どもたちのために８年も続けている駄菓子屋の隣にできたフリースクールです。このフリースクールでも、地域の市民の方々、市民団体の方々、西東京市役所職員、西東京市職員組合、その他地域の沢山の方々と力を合わせ、繋がり、伝えあいながら、子どもたちの声や子どもたちの意見を聴いていきたい。これからも、子どもたちの「みらい」を、ともにつくりあげていきたいと考えています。

「みんなで、子どもをまんなかに、わいわい、わくわく、いきいき」

「子ども条例のあるわが街西東京市で」